（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第28輯

南大阪湾岸北部流域下水道事業に伴う

虫取遺跡・板原遺跡

―― 発掘調査報告書 ――

１９８８

財団法人　大阪府埋蔵文化財協会

（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第28輯

南大阪湾岸北部流域下水道事業に伴う

虫取遺跡・板原遺跡

―― 発掘調査報告書 ――

（公財）大阪府文化財センター
蔵書
第22266号

1988

財団法人　大阪府埋蔵文化財協会

（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第28輯

虫取遺跡・板原遺跡　正誤表

	誤	正
例言１行目	泉大津市所在の板原遺跡、虫取遺跡	泉大津市所在の虫取遺跡、和泉市所在の板原遺跡
凡例７、	水田－ＯＺ	ＯＺ－水田
６Ｐ20行目	第２図・第１表	第２図
25行目	周辺部の泉大津市から高石市	周辺部の高石市
７Ｐ６行目	しうるまでは	しうるまでには
８Ｐ25行目	水源池	水源地
９Ｐ16行目	連面	連綿
26行目	水源池	水源地
10Ｐ８行目	出土している	検出している
11Ｐ14行目	『日本史』別冊	『図説　発掘が語る日本史』別巻 1986・12
36行目	大阪市美術館	大阪市立美術館
12Ｐ９行目	教育委員会刊に	教育委員会に
14Ｐ第４図	調査点描	調査風景点描
同	大泉大津	泉大津
同	溝側	海側
同	小学校か	小学校が
15Ｐ８行目	国際新空港	国際空港
17Ｐ第５図	地区割り法模式図	地区割り方法模式図
18Ｐ３行目	Ⅰ層・・・・Ⅱ層	１層・・・・２層
第６図	Ａ　Ｙ＝-53517.675	Ａ　Ｙ＝-53516.675
19Ｐ27行目	１ｂ橙褐色	１ｂ層橙褐色
22Ｐ15行目	シルト土質	シルト質
16行目	粘土質土層	粘質土層
20行目	客土が多い	客土に多い
27行目	釣鐘部分	釣穴部分
25Ｐ１行目	柱痕などの	柱などの
６行目	径状は約	径約
11行目	径は約	径約
同	概ね深さは	深さは
23行目	大半を削平していると	大半が削平されていたと
26Ｐ10行目	充分	十分
14行目	連面	連綿
27Ｐ２行目	挟でおり	挟んでおり
９行目	存在してたこと	存在していたこと
35Ｐ８行目	第４図	第14図
９行目	第３図	第13図
37Ｐ５行目	図版２	図版６
６行目	図版１	図版５
11行目	第７図	第17図

埋蔵文化センター
図書
第22266号

序　　文

主要先進国とはいえ、日本の下水道普及率は欧米のそれと比較すると、はなはだはずかしいかぎりです。大阪府においても、ここ10年程飛躍的に予算をのばして下水道事業の整備、拡張をはかってきているところですが、まず処理場や下水幹線網の整備が急がれるところから家庭までの枝幹線網はまだまだ道遠しの状況の様です。

今回の虫取、板原両遺跡の調査も南大阪湾岸北部下水道事業、幹渠築造事業の一環として緊急に実施したもので、大部分シールド工法で施工されるため直接破壊される発進立坑部分のみに限定したものとなりました。

調査結果については本報告書に詳しく記述しているところではありますが、小規模な調査のため既往の調査の成果の域を越えることが出来なかったのは残念ですが、遺跡成果の空白をわずかながらではありますが埋めるものとなりました。

本報告書が虫取、板原両遺跡のみならず地域史解明の資料として利用されることを願って止みません。

最後に調査の実施にあたり、種々ご配慮いただきました大阪府土木部、南大阪湾岸流域下水道事業所をはじめ関係者各位に謝意を表すると共に、特に貴重な人材を直接派遣いただいています近畿府県教育委員会並びに大阪府下市町教育委員会に対し深謝申し上げます。

昭和63年７月

財団法人　大阪府埋蔵文化財協会
理事長　浅　野　素　雄

例　　言

1．本書は南大阪湾岸北部流域下水道事業にともなう、泉大津市所在の板原遺跡、虫取遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は大阪府土木部の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。

3．板原遺跡の調査は財団法人大阪府埋蔵文化財協会調査課第４班が担当し、技師服部みどりが昭和63年３月15日から３月24日まで現地調査にあたった。

4．虫取遺跡の調査は同協会調査課第４班が担当し、技師田中一廣が昭和63年５月10日から６月27日まで現地調査にあたった。

5．調査および整理作業にあたって大阪府教育委員会文化財保護課をはじめ、泉大津市教育委員会、和泉市教育委員会、ならびに地元関係者の助言、協力を得た。

6．本書の原稿執筆および編集は各調査担当者が行い、写真整理および最終調整は本協会資料班が担当した。

7．なお、出土遺物・作成した図面・写真などの記録類は、資料班で保管している。広く利用されることを希望する。

虫取遺跡

目　　次

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境……3

1．位置……3

2．地理的環境……4

3．歴史的環境……6

第Ⅱ章　虫取遺跡既往の調査……12

第Ⅲ章　調査の経過……15

1．調査に至る経過……15

2．調査の経過……16

第Ⅳ章　調査の方法と成果……17

1．調査の方法……17

2．調査の成果……19

層序……19

包含層と出土遺物……22

検出遺構……23

第Ⅴ章　まとめ……26

挿図目次

第1図　虫取遺跡の位置……3

第2図　虫取遺跡周辺旧地形と遺跡の分布（1/50000）……5

第3図　虫取遺跡調査地位置図(1/5000)……13

第4図　調査風景点描……14

第5図　地区割りの方法模式図……17

第6図　調査区位置（地区割り）図（1/400）……18

第7図　調査地横断面・縦断面土層図（1/80）……20

第8図　調査地点（№.9地点）ボーリング土質柱状図……21

第9図　土坑1－〇〇平面断面図・写真（1/30）……23

第10図　調査地遺構全体図（1/100）……24

図版目次

図版一　虫取遺跡周辺航空写真（昭和40年１月撮影）
図版二　Ａ調査区全景（北東・南東から）
図版三　Ｂ調査区全景（北西・南西から）
図版四　虫取遺跡土層・遺物（東壁・出土遺物）

板原遺跡

目　　次

第Ⅰ章　調査に至る経過……31
第Ⅱ章　位置と環境……35
第Ⅲ章　調査成果……36
第Ⅳ章　まとめ……37

挿図目次

第11図　板原遺跡調査地点位置図……31
第12図　板原遺跡既往調査一覧図……32
第13図　板原遺跡周辺の主要遺跡……33
第14図　板原遺跡周辺地質図……35
第15図　北東壁断面図……36
第16図　南東壁断面図……36
第17図　和泉国条里方位図……37

図版目次

図版五　板原遺跡周辺航空写真（昭和62年撮影）
図版六　板原遺跡周辺航空写真（昭和40年撮影）
図版七　板原遺跡（調査前風景）
　　（トレンチ全景）
図版八　板原遺跡（北東壁断面）
　　（南東壁断面）

虫取遺跡の調査

凡　　例

1、本書の遺構実測図・文中に用いた方位のNは、国土座標第Ⅵ系の座標北を示す。尚、真北方向へは東へ0°19'・磁北へは西へ6°20'の位置関係である。

2、標高は、T.P.（東京湾標準潮位）で表示し、数列中の「、」はコンマを示す。また、国土座標の数列中の「、」は記数の位どりを示し、単位はすべてmである。

3、本調査における遺構実測は、平面図・断面図1/20を作成し、それを原図として図版を作成した。

4、本書の遺構全体図1/100、土層図・遺構図1/80・1/30を基本とする。

5、本書の遺物写真は縮尺をあえて統一していない。

6、本書に示した遺跡の地区割りについては、新版大阪府地域計画図（1/2500）を基にした当協会独自の地区割り呼称と、現地で設定した調査区名とを併用している。具体的には、第Ⅳ章　1，「調査の方法」で記す。

7、遺構及び遺構番号呼称はすべて協会独自の呼称方法をとる。即ち、遺構の種類に関わらず検出順に通し番号を付し、遺構記号を記して種類を明記している。

　　ＯＯ－土坑　ＯＰ－ピット　ＯＲ－河川　ＯＳ－溝

　　ＯＸ－その他・不明　水田－ＯＺ

8、本書に記載した遺跡分布図・位置図の作成には、国土地理院発行の1/25000地形図（昭和24年・59年版）を使用した。

9、本書で用いた色調の表現は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』5版　1976年9月による色片との比較で記載している。

10、本文中では「先土器」「縄紋」「土坑」「杯」「椀」「復原」「跡」という語句を用いた。

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境

1，位置（第１図）

虫取遺跡は、大阪府泉大津市虫取・我孫子町に所在している。

泉大津市は、大阪平野の南西部に位置し、和泉北部の「泉北」と呼ばれる地域にあたる。北は高石市、東は和泉市、南は大津川を挟んで泉北郡忠岡町と接し、西は大阪湾に面している（第１図）。市域は、11.77km^{2}と小面積ではあるが、人口約69200人（22530世帯）を有している。昭和６年、旧大津町・上条村・穴師村が合併し大津町となり、昭和17年４月１日に泉大津市として府下で７番目に市制が施行されている。現在、当時とほぼ同一の市域を有している。市街地は、南海電気鉄道本線と府道堺阪和線や大阪臨海線に沿って、明治以降商工業都市として発展した。地場産業の毛布・ニットなどの毛織物工業が輸出産業として発展し、その生産高は全国の96パーセント以上を占めた。

近年は、大阪のベッドタウンとして宅地開発の波が押し寄せ、市域全体が市街化区域に

第１図　虫取遺跡の位置

なっている。海岸線は、堺・泉北臨海工業地帯として埋め立てられ、カーフェリーが発着するなど、湾岸都市としての性格をも持ってきている。

虫取遺跡は、丁度槇尾川が牛滝川と合流して大津川となる地点で、北東に広がりをもつ。

今回の調査地は、遺跡東辺部の我孫子町192番地に属する。調査地中央ＨＪ杭で第Ⅵ系Ｘ＝－167428、000　Ｙ＝－53520、000、緯度経度は、Ｂ＝34°29′21.094″　Ｌ＝135°25′1.914″の位置にある。

我孫子は、中世以来の我孫子（吾孫子）郷にあたる。また『新撰姓氏録』には「我孫公豊城入彦命男倭日向健向八網田命之後者」とあり、網曳御厨があったとする説がある。虫取村とともに我孫子も江戸時代以降、米・麦のほか木綿・菜種を生産し吾孫子荘の特産品として筵があったことが知られる。

明治20年長井村と辻村が合併して我孫子を村名とした。明治22年には虫取・我孫子共に、穴師村の大字になっており、現在は泉大津粉河線沿いに繊維工場・運輸会社・事務所・銀行・住宅地などが広がっている。

２，地理的環境（第２図）

泉州地域は、和泉山脈が海岸と平行して南北に走り、その基盤山地から張り出す丘陵と洪積段丘とが発達している。大阪湾に注ぐ各河川が、これらを深く削りこんで樹枝状の尾根と谷とを形成し、起伏に富んだ地形を呈しているのが特徴である。また、このことから、河岸段丘が発達した河川流域の谷筋は地形的にも一つの小地域を形成し、一定のまとまりを構成していることも指摘できる。

洪積段丘が海岸付近まで広く発達している為、沖積地は非常に狭い。低位面は広い範囲に発達し、海岸平野部の大半は低位段丘面で占められている。

泉大津市の大半も低位段丘面となり、海岸砂帯・後背低地が海岸部に沿って認められるのみである。

段丘面は、水利が悪く農業用水を得るのに困難であり、開発にあたっては数多くの溜池を必要とした。この為、近年まで埋積谷を堰止めて多数の溜池が構築されていた。また、温暖で降雨量が比較的少ない瀬戸内式気候に属することも、数多くの溜池を必要とした原因である。洪積段丘の高位面や中位面は、現在平坦地化され、集落と共に畑地・水田の生産地として利用されている。

さて、虫取遺跡周辺であるが、東の方向には洪積段丘高位面台地の信太山丘陵（頂部で

第２図　虫取遺跡周辺旧地形と遺跡の分布（Ｓ＝1/50000）

標高約80～70m）が南北に延びており、多くの谷が刻まれている。その周囲には、扇状地化した段丘が発達している。信太山丘陵と南に続く和泉丘陵を横切って流れる槇尾川（大津川）は、和泉の中でも最も大きな河川である。葛城山頂付近に源を発し、途中、松尾川・牛滝川と合流して大津川となって大阪湾に注いでいる。第２図からも解るように、忠岡町馬瀬の牛滝川の合流点から下流まで、最大幅で300m程の帯状を呈した大津川の氾濫原が認められる。

自然堤防は南曽根から北曽根付近に、森から王子川には微高地が認められ、高まりを形成している。後背低地は、海岸の砂礫帯の背後で海岸に平行して存在している。これは助松付近ではやや広い。

近年の地理学の成果によれば、王子川・緑川・宿居川・古川・放生川・前田川などの放射状の分流は、埋積谷を形成している事が指摘されている[(1)]。埋積谷は池上付近では千草池・油池を結ぶ谷、豊中付近では古池・要池付近の前田川・放生川の旧河跡、虫取付近にも大津川に平行する河道跡の埋没が認められている。

虫取遺跡は現海岸から約２㎞の距離にあり標高10m前後で、大部分は海進海退作用によって形成された低位段丘面に立地しているが、南の大津川に沿った地区は氾濫原が広がり、多くの池が列状に延び、複雑に大・小の埋積谷が走っている環境にあった。

これら埋積谷は弥生・古墳時代にあっては、低地として水田などに利用されていた可能性が高い。

３，歴史的環境（第２図・第１表）

虫取遺跡の歴史的環境を述べるにあたり、人間と遺跡との関わりについて、考古学的側面を中心に周辺部を簡単にみておきたい。

和泉地域の先土器時代に属する遺物は、近年になって発見されたものが多く、現在、増加の一途をたどっている。

泉大津市では、遺構・遺物は今のところ発見されていないが、周辺部の泉大津市から高石市・和泉市にかけて広がる大園遺跡の段丘の黄褐色粘土中から先土器時代の国府型ナイフ形・舟底形・削器などの石器が出土している[(註２)]。和泉市父鬼の標高約390mの大床遺跡からも、ナイフなどや石核・剝片などがまとまって検出されている[(註３)]。

その他、先土器時代末から縄紋時代草創期にかけての石器や剝片の出土が知られる遺跡を挙げると、瀬戸内技法の石核やチャート製有舌尖頭器の出土した野々井遺跡や百舌鳥本

町遺跡（以上堺市）、ナイフ形石器・有舌尖頭器の出土を見た伯太北遺跡・A91地点遺跡・和気遺跡・万町北遺跡（以上和泉市）、三田遺跡・上フジ遺跡・栄ノ池遺跡・下池田遺跡・西山遺跡・琴山遺跡・畑遺跡・葛城山頂遺跡・海岸寺山遺跡（以上岸和田市）などが知られている。しかし、いずれも明確な遺構を伴っておらず、後世の覆土からの出土であるので、資料を集積することが今後の課題となる。これらの分布は、移住生活の範囲を示すようであるが、当時の生活跡を復原しうるまでは至っていないのが現状である。また姶良火山灰などを検出する事も重要となる。

このような中で、先に挙げた大園遺跡からは、剥片類と有舌尖頭器数十点以上がまとまって出土している。昭和56年度の府教育委員会の調査では、石器製作跡や石材の散布ユニット・ブロックが調査されている。(註4) そのほか、昨年、堺市南花田遺跡（堺市）でも同じ様な縄紋時代草創期のブロック・住居跡？などが発見された。(註5)

縄紋時代も遺構を伴ったものが少なく、泉大津市では明確な遺構は検出されていない。昭和62年に調査を行った槇尾川上流の和泉市横山の仏並遺跡（和泉市）からは、早期後半の鵜ガ島台式土器や、中期末から後期の福田ＫＩＩ式や後期～中津式期の土器・北白川上層式の地床炉を伴った竪穴住居跡・土坑・多数のピット・土器棺墓が確認されている。また今尚話題を集めている後期前半に属する素焼の土製仮面も出土している。(註6)

虫取遺跡東方の板原遺跡（和泉市・泉大津市）では、後期の中津式の流路や福田ＫＩＩ式の遺構面・晩期の溝・ピットが報告されている。(註7) これらの他にも、泉大津市の豊中・古池・上池の埋積谷から中期末の土器が採取されている。

仏並を除けば、泉北では中期以前の遺跡は少なく、後期以降遺跡数は増加している。伯太北遺跡・府中遺跡（以上和泉市）から石棒・石鏃と後期中葉の土器、軽部池西遺跡の流路Ｂ589－ＯＲから北白川上層式土器や元住吉山式土器・石棒、山ノ内遺跡（以上岸和田市）では多数の石鏃などの石器や剥片類と共に宮滝式土器や土器棺墓・風倒木痕の土坑が確認されている。また、標高約850ｍの高所の葛城山頂で斜縄文を持つ土器が、箕土路遺跡では中期初頭の鷹島式の爪形文土器が採集されている。昭和36年の調査の春木八幡山遺跡（以上岸和田市）では、中期から晩期の土器が報告されている。(註8) 西山遺跡（岸和田市）や脇浜遺跡（貝塚市）でも滋賀里式土器などが近年発見されてきている。

そのほかに、万崎池遺跡・石津町東遺跡・南榎町遺跡・百舌鳥陵南遺跡・四ツ池遺跡（以上堺市）などからも遺物の出土が知られる。

晩期では、四ツ池遺跡・野々井遺跡・陵南遺跡（堺市）・黄金山遺跡・伽羅橋遺跡・大

園遺跡助松地区（高石市）・虫取遺跡・板原遺跡（泉大津市）・伯太北遺跡（和泉市）・春木天ノ川遺跡・栄ノ池遺跡（岸和田市）と出土遺物は増加しており、今後は住居跡などの遺構の検出によって、生活空間を明確にしていくことも課題となろう。

和泉北部の弥生文化は、晩期から続く四ツ池遺跡（堺市）の畿内第Ⅰ様式古段階で成立している。晩期の船橋式土器に籾圧痕[註9]があり、和泉における米作りを確認する初期の遺跡である。やや遅れた中段階に至って、泉大津市曽根町から和泉市池上町に展開する池上・曽根遺跡が弥生文化を開花させている。

虫取遺跡の北の低位段丘に立地する池浦遺跡（泉大津市）は、前期中段階に出現する遺跡と考えられる。さらに虫取遺跡では、畿内第Ⅰ様式新段階～Ⅱ様式の土器を出土し[註10]、弥生前期末には出現した遺跡であると思われる。しかし、池浦遺跡では中期以降の土器は発見されておらず、虫取遺跡でも中期後半以降の状況は明かでなく、集落は短命だったようである。

そのような遺跡もある一方で、四ツ池遺跡・池上遺跡は前期に成立し、中期に至ると環濠を巡らせ、後期には集落を分散・発展継続させて、和泉北部の大拠点集落へと展開を見せている。

和泉の弥生拠点集落は、海岸線に平行して線形分布を示す。これらの集落は、一時間での歩行可能距離である5.5㎞間隔のキャッチメントエリアに位置していることが近年、指摘されている[註11]。

中期になると遺跡数が増大し、かつそれぞれの遺跡規模が拡大される現象が見られる。周辺部では、府中遺跡・和気遺跡（和泉市）・土生遺跡・箕土路遺跡・下池田遺跡（岸和田市）などを挙げることができ、多くの竪穴住居跡・溝・土坑・方形周溝墓などの調査例が増えてきている。穴師小学校校庭遺跡からは、中期の壺棺が発見されている[註12]。古池遺跡の「要池」からは、府教育委員会の調査で有鉤銅釧の出土がある[註13]。

また、弥生中期から後期の散布地を挙げると、砂丘上の助松遺跡（泉大津市）・羽衣砂丘遺跡[註14]・伽羅橋遺跡・水源池遺跡（以上高石市）などがあり、内容については解らないものの小規模な集落が散在していたことが知られる。

中期に拡大した集落が後期に至ると縮小化・分散化する傾向が現れる。その中で高地性の集落成立がある。和泉市の信太山台地西端に惣ノ池遺跡が成立し、竪穴住居跡の他、工房跡と考えられている竪穴が検出されている[註15]。観音寺の丘陵には、観音寺山遺跡が存在した。集落の周りにはＶ字濠を巡らし、100棟以上の竪穴住居跡が確認されている[註16]。

やがて、古墳時代に突入していくが、海岸平野部の遺跡は磯ノ上遺跡（岸和田市）のように新たに出現する遺跡があるが、弥生後期の集落と重複している場合が多い。

高地性の集落は姿を消し、海岸平野部の低位段丘の縁辺や自然堤防上に豊中遺跡・七ノ坪遺跡・池上曽根遺跡森地区（泉大津市）などの中規模集落が成立し、政治的関係を背景に集落が造営され続けている。七ノ坪遺跡は、昭和56年泉大津高校体育館改修工事の調査で3000㎡にわたって新旧２枚の前期の水田跡が検出されたが、１つの居住集団だけでは経営できない規模を呈しており、まさに首長を中心とした共同組織の経営を伺わせる。また、住居・墓地群も検出され、古墳前期集落の住居地と墓地・生産地の資料が呈示された遺跡でもある。

同じ低位段丘上の豊中・古池遺跡からは、大量の庄内・布留式土器と共に、木製素環頭太刀の柄・木製剣・農耕具・建築部材などの木製品が多量出土している。[註17] 伯太北遺跡（和泉市）からも、布留式土器とともにナスビ形木製品・鉄斧の柄などが出土している。

古墳の分布は４世紀から５世紀にかけて信太山丘陵の先端に前方後円墳の和泉・黄金塚古墳[註18]・丸笠山古墳（和泉市）、唐国と山直を分ける東山丘陵の先端に摩湯山古墳（岸和田市）が成立している。４世紀末から５世紀には百舌鳥野に百舌鳥古墳群の形成が開始され、大型前方後円墳を中心として連面と築造が行われるが、石津川以南は和泉独自の在地小地域として展開していくと考えられる。信太山には円墳の鍋塚古墳、帆立貝式の貝吹山古墳[註19]（和泉市）、海岸平野部では帆立貝式の大園古墳、前方後円墳の富木車塚古墳[註20]（高石市）などの展開をみせる。富木車塚古墳は、木棺直葬の墓壙６基と後円部に横穴式石室をもつ古墳で、水晶や玉類の副葬があった。水源地遺跡や黄金山周辺は漢式系土器の出土と合わせ、韓半島の墓制の影響を感じさせる。同じ頃、信太山丘陵に和泉最大の群集墳信太山（千塚）古墳群[註21]85基の成立をみている。主体部は横穴式石室・木棺直葬・箱式石棺・埴輪円筒棺・いわゆる「かまど塚」など多種類にわたる。６世紀前半から後半の築造になる。海岸平野部には古墳は知られていないが、春木八幡山遺跡で検出された小古墳などが近年発見されており、過去に破壊あるいは埋没している可能性も指摘できる。

古墳時代の５世紀から６世紀にかけての集落は、低位段丘上に続々と出現している。大園遺跡や水源池遺跡・東雲遺跡では、５世紀後半には掘立柱建物で住居群を構成し、倉と溝を伴って単位集団の連合集落へと展開している。大園遺跡は、各調査機関によって10万㎡以上の発掘調査が実施され、大集落の様相が明かになってきており、集落研究に寄与している。[註22]

しかし、6世紀末迄続いた集落は7世紀になると衰退を始め、集落の実態はいま一つ明かでない。散布地として板原遺跡・虫取遺跡・助松遺跡・穴師遺跡がある。

律令体制の成立と共に、和泉も他の諸国よりは遅れるものの天平宝字元（757）年再び河内国から独立して国としての成立をみている。和泉市府中町に国府が置かれたが、郡衙も含めその正確な位置や内容は未だ定かになっていないのが現状である。

奈良朝寺院の分布は、槇尾谷筋では和泉寺－坂本寺－池田寺－安楽寺（のち和泉国国分寺）が一直線に並び、一郷一寺の成立をみている。

飛鳥・奈良の遺構・遺物を出土している遺跡は、羽衣砂丘・綾井東遺跡（高石市）・池田寺遺跡・万町北遺跡（和泉市）・吉井一之坪遺跡・栄ノ池遺跡・山直北遺跡・上フジ遺跡（岸和田市）などが知られている。

泉大津は古代には和泉国和泉郡下泉郷に属しており、紀貫之「土佐日記」や「更級日記」に「小津の泊」と見え、和泉灘良港として小津の港は、古代以来国府の外港として海上交通の要地となっている。

また、『大津町志』[註23]には虫取に神亀より天平年間に行基開山とする極楽寺があったとする説がある。現在、「極楽橋・大門・院内橋・風呂前・経塚」などの小字名が残る。

今は穴師小学校の敷地となっているが、宝亀年間に木像が大津浦に漂着し安置したのが始まりとされる穴師・薬師寺があった。基壇が確認され穴師薬師堂銘（「穴師堂」）の文字瓦が出土している。室町期の十二神將が現在の薬師堂に安置されている。薬師寺は、和泉五社の二の宮である穴師神社の神宮寺にあたる。式内社である穴師神社には、三間社流造檜皮葺本殿や摂社建物など重要文化財も多い。

また、楠氏幕下の真鍋主厚大夫・斉藤主膳・藤林民部大輔の宇多大津城、真鍋氏の下条大津真鍋城、要池のあたりに寺田天右ェ門の苅田城、千原町に天文年間に玉井源秀の築上になる千原城や曽根城、松ノ浜にあったとされる磯上無仁入道の二田城、助松の田中遠江守陣屋などの室町などから近世にかけての城郭跡も実態の解明が立ち遅れており、今後注意を払う必要があろう。

これら以外にも第二阪和国道の建設を契機とし、住宅・道路・土地整備事業などの開発に当たって膨大な資料が蓄積されている。今後、これらが整理され調査結果が公開されることも今後の課題であり、問題点も多岐に展開していくであろう。

註

（1）　古環境研究会「大園遺跡及びその周辺における完新世後期の環境復元」『大園遺跡助松地区第一

次発掘調査報告書』豊中古池遺跡調査会　1973・3　日下雅義「遺跡と埋没環境－地形分類図・地形環境の復原図」『第18回大阪府下埋蔵文化財担当者研究会資料』1988・7・10　(財)大阪文化財センターなど

（2）　「大園遺跡発掘調査概要」『大阪府文化財調査概要』1975他　神谷正弘編『大園遺跡発掘調査概報2』1976・3

（3）　森浩一『和泉市史』第一巻　和泉市役所　1956・10　府立泉大津高等学校地歴部が調査を実施し大床遺跡と呼応している。

（4）　藤永正明編「大園遺跡発掘調査概要・Ⅶ」『大阪府文化財調査概要』1982・3　岸本道昭「大阪府和泉市・高石市所在大園遺跡の調査」『第7回近畿旧石器交流会資料』1983

（5）　安里進編「南花田遺跡発掘調査概要」『大阪府文化財調査概要』1988・3

（6）　岩崎二郎・松尾信裕他『仏並遺跡発掘調査報告書』(財)大阪府埋蔵文化財協会発掘調査報告書第5輯　1986・3　岩崎二郎「大阪府和泉市仏並遺跡の土面」『考古学雑誌』72－3　1987　岩崎二郎・松尾裕信「大阪府仏並遺跡」『月刊文化財』　1986・11　同「西日本でまれな縄文集落仏並遺跡」『日本史』別冊

（7）　久米雅雄編「第2阪和国道内遺跡発掘調査概要（報）－板原遺跡－」『大阪府文化財調査概要』1980・3

（8）　堅田直編『春木八幡山遺跡の研究』帝塚山大学考古学研究報告第1輯　1965・3

（9）　酒井龍一編『第2阪和国道内遺跡発掘調査報告書』4　第2阪和国道内遺跡調査会　1971・3

（10）　坂口昌男編『泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報2・3』泉大津市文化財調査報告9・10　1984・3　1985・3

（11）　酒井龍一「弥生時代中期・畿内社会の構造とセトルメントシステム」『文化財学報』第三集　1984・3　同「大阪湾沿岸地域における弥生セトルメントシステム－未発見集落の予測性－」『考古学論集』第2集　1988

（12）　森浩一「泉大津市穴師小学庭の弥生式壺棺」『和泉考古学』5　1961・3

（13）　森浩一編『大阪府史』第1巻　1983

（14）　宇田川誠一「羽衣砂丘遺跡調査報告　大阪湾沿岸の古代漁村集落の一資料」高石町資料第1輯　高石公民館　1959・3

（15）　石部正志編『信太山遺跡調査概報』信太山遺跡調査団　1960　同『鶴山地区信太山遺跡　その2』和泉市教育委員会　1970・9

（16）　森浩一・鈴木博司「和泉市観音寺山弥生集落調査概報」観音寺山遺跡調査団　1968・10　前田豊邦「和泉観音寺山弥生集落調査概報」観音寺山遺跡調査団　1968　前田豊邦「和泉観音寺山遺跡集落発掘調査概報」『ヒストリア』52号　1969

（17）　坂口昌男ほか『豊中・古池遺跡発掘調査概報　そのⅢ』豊中・古池遺跡調査会　1976・3

（18）　末永雅雄・森浩一ほか『和泉黄金塚古墳』日本考古学報告第5冊　1954・3

（19）　広瀬和雄「貝ぶき山」『大園遺跡発掘調査概要・Ⅲ』1976・3

（20）　上田舒・森浩一・藤原光輝ほか『富木車塚古墳』大阪市美術館　学報第3　1960・3

（21）　森浩一編『和泉信太山千塚の記録』　泉大津高校地歴部　1963・10

（22）　広瀬和雄「大園遺跡の集落構成－古墳時代の一資料－」『摂河泉文化資料』10号　1978　同「古墳時代の集落類型－西日本を中心として－」『考古学研究』97号　1978　丹羽祐一「大園遺跡における古墳時代中期後半の建物群の構成」『奈良大学紀要』10号　1981　同「大園遺跡における古墳時代集落の変遷」『文化財学報』第一集　1982など

（23）　『大津町志』大津町役場　1932・3

第II章　虫取遺跡既往の調査

虫取遺跡は、泉大津市虫取の旧諸瀬池を中心に、土師器・須恵器が散布する所として知られていたり、周辺の土木工事現場などで地元研究家によって土器が採集されたりして、昭和30年半ば頃から知られていたようである。(註1)

それらを受けて、昭和33年に遺跡地図作成に伴う行政として初めての調査の際、森浩一氏・堅田直氏らが泉北（泉大津市）を担当し報告を行っており、『大阪府文化財総合分布図及び文化財地名表』1959　大阪府教育委員会刊に周辺部がマークされている。その後、今日の文化財分布図の先駆けである昭和52年刊行の『大阪府文化財分布図』及び『文化財地名表』(註2)に、範囲を径1.6㎞の遺跡としてマークされていたものの、不明な点が多かった。

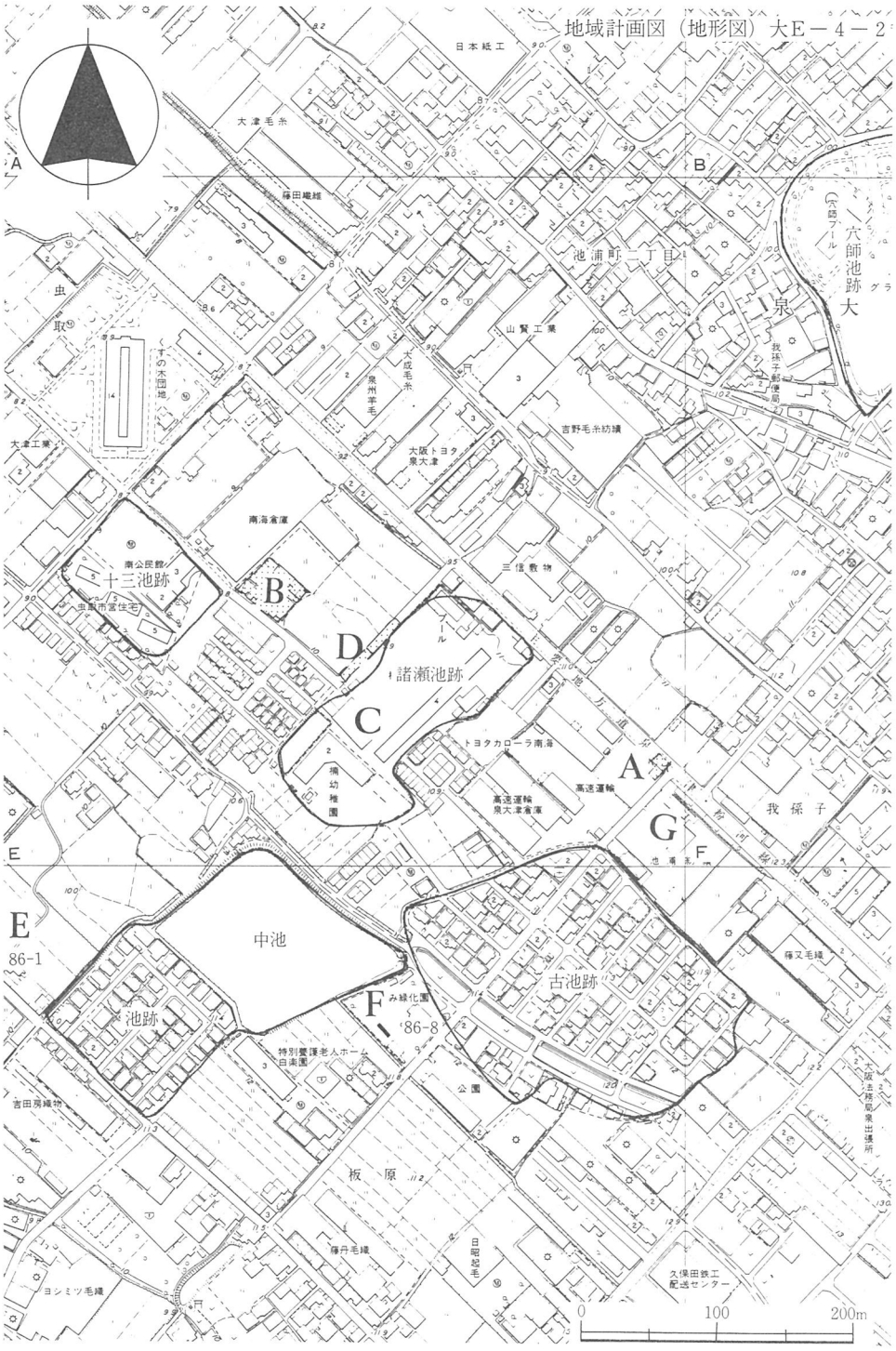
昭和53年に至って大阪府教育委員会が宅地開発の事前調査として、初めて発掘調査を実施している。(註3)

その結果、縄紋晩期の土器と弥生前期の畿内第Ⅰ様式新段階の土器を包含する土坑や、６世紀後半の古墳時代集落の存在が判明した。また、平安時代末から鎌倉時代にかけての掘立柱建物や奈良時代建物の柱穴などが検出されたという。

昭和54年には、虫取の諸瀬池において現楠小学校の建設に伴って池内の調査を泉大津市教育委員会が実施している。遺構は、池底の改修などによって削平されており、発見されなかったらしい。

さらに昭和58年４～５月には、諸瀬池の堤防をコンクリート擁壁にして一部に市道や住宅が設けられることになり、工事に先立って泉大津市教育委員会が調査を実施している。その結果、縄紋時代後期・晩期、弥生時代前期から中期前葉、古墳時代、奈良～平安時代などの溝・落込み・ピットが検出された。遺物では、土師器・須恵器・石器などの他に縄紋晩期の滋賀里式土器や長原式土器と共伴して、畿内第Ⅰ様式新段階の土器が出土している。(註4)

その後、泉大津市教育委員会は国庫補助金を得て、住宅建設・工場倉庫建設などの小規模な発掘・試掘調査と水道やガス管埋設などに伴う立会調査を昭和58年以来実施している。今のところ、耕作に伴った遺構以外顕著な出土を見ていないようである。(註5)



第３図　虫取遺跡調査地位置図（Ａ：今回調査地　Ｂ：府教委調査地点　Ｃ～Ｇ：市教委調査地点）（Ｓ＝1/5000）

註

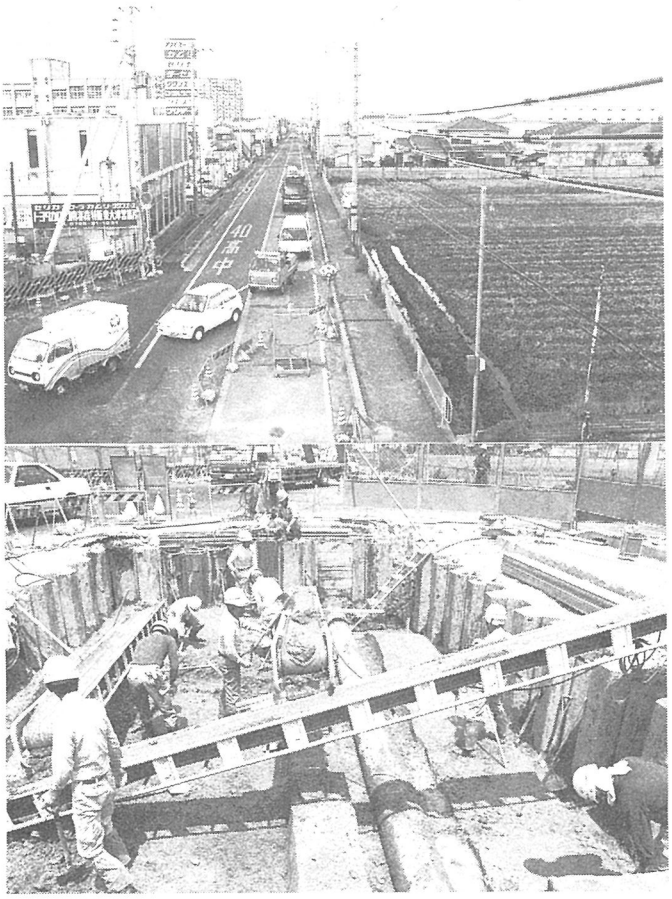
（1）　諸瀬池付近の水田出土の須恵器短頸壺が紹介されている。森浩一「泉大津市諸瀬池出土の須恵器」『和泉考古学』5　1961・3　また、泉大津高等学校地歴部によって昭和31年8月に我孫子交差点北東の穴師（大E－4－2－F24地点）で、中世羽釜井戸が調査されている。森浩一「泉大津市の土釜井戸」『土木工事の破壊に伴う考古学調査報告第1冊』和泉考古学別冊　大阪府立泉大津高等学校社会科生徒自治会地歴クラブ　1958・2

（2）　大阪府教育委員会文化財保護課編『大阪府文化財分布図』『大阪府文化財地名表』大阪府教育委員会　1977・3　須恵器・土師器の散布地として認識されていた。

（3）　この調査が本格的な調査の最初のものとなった。調査は、府教育委員会文化財保護課が実施した。広瀬和雄氏の御教示による

（4）　坂口昌男・楠山享司「3章　発掘調査報告　3節虫取遺跡」『泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報』2　1984・3　楠山享司「3章　発掘調査報告　5節虫取遺跡出土遺物」『泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報』3　1985・3

（5）　昭和58年度は10件の立会と1件の発掘調査、昭和59年度は17件の立会と1件の発掘調査、昭和60年度は10件の立会と1件の発掘調査、昭和61年度は6件の立会と1件の発掘調査、昭和62年度は7件の立会と1件の発掘調査が実施され、呈示されている。坂口昌男ほか『泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報』2　1984・3　坂口昌男ほか『泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報』3　1985・3　坂口昌男ほか『泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報』4　1986・3　坂口昌男ほか『泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報』5　1987・3　坂口昌男ほか『泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報』6　1988・3



第4図　調査点描
（上・大泉大津粉河線調査地より溝側を望む左上小学校か諸瀬池跡、下・A区調査風景）

第Ⅲ章　調査の経過

1，調査に至る経過

和泉地域でも、昭和40年代の泉北ニュータウンの造成や第２阪和国道の建設に端を発して、道路建設・住宅建設に伴った大規模調査が昭和50年代に入り急激な伸びを示すこととなった。

そうした中、昭和49年８月の運輸省の答申以来、関西国際新空港の建設が昭和68年春の開港を目指して大阪湾の泉州沖５㎞・120haを埋め立てて着工されることが閣議決定された。昭和59年９月には、官民協力の泉州沖関西国際空港計画の国家プロジェクトがスタートした。昭和60年12月には「関西国際空港関連施設整備大綱」が発表された。

こうした動きの中で、近接府県も含めた地域において、空港建設に伴って地域整備事業が急がれることとなった。大阪府は、昭和61年12月に「関西国際空港関連地域整備計画」を作成した。今回の調査の原因となった南大阪湾岸北部下水道事業もまた、こうした空港関連の事業の一つに組み込まれている。

今回の調査は、主要地方道・泉大津粉河線の地下約12mを直径2.48mのシールド工法によって通すというもので、1.65mの下水管渠を設けることに対して、昭和62年４月、府土木部が府教育委員会文化財保護課に、埋蔵文化財の取扱いについての確認があった。

府教育委員会は府土木部と協議を持った結果、直接破壊される発進立坑築造工事部分の発掘調査を行うことで合意した。

虫取遺跡内に設けられることとなった立坑は面積約150㎡・深さ約15mまでを掘削するというものであった。150㎡という小面積ではあるが空港関連事業にあたることから、府教育委員会文化財保護課の指示により、この事業に伴う発掘調査を(財)大阪府埋蔵文化財協会が担当することになった。(註1)

協会は、府教育委員会の指示を受けて大阪府南大阪湾岸流域下水道事業所工務課と協議に入った。

協議では、交通量の多い道路であり早急に対応する必要があることから、まず工事地に工事用の25m鋼矢板を先行して設置し、現道路を切り替え通行を確保した上で工事行程と調整し、発掘調査にかかることなどが取り交わされた。

2，調査の経過（第４図）

（財）大阪府埋蔵文化財協会は、協議を受けて交通路が確保され工事用立坑が設定された昭和63年５月９日現地にて調査についての打ち合わせを持った。

５月11日迄にアスファルトなど道路盛り土部分の撤去を行う事とし、13日機械掘削を開始した。週明けまで配電などの準備工を実施し、16日から層位ごとに人力掘削を開始した。薬剤注入ボーリング工事と交錯しながらの調査で勇水などがあったが、19日遺構精査・掘削作業を終了し、20・23日地山面の断ち割りで地山土層の確認を行った。23日写真撮影。25日割付、実測作業を26日まで実施し、前半部分Ａ区を終了した。

Ａ区を鉄鋼板で復旧し、迂回道路を元に戻した後、後半Ｂ区調査を６月２日から着手した。

入梅前半の大雨の為遅れたが、雨の中、道路撤去。６日機械掘削。７日から２ｂ～３ａ層の人力掘削開始。８日大雨、近畿地方梅雨入り。10日３層掘削再開し、13日４層上面で最終精査。14日遺構掘削と東壁を１ｍ幅で断ち割りにかかる。16日全景・断面写真撮影の後、断面実測。17日東壁撤去。府教育委員会文化財保護課の立会を受ける。20日平面実測を完了し、現場作業終了す。22日掘削の立会と撤収。

註

（１）　泉大津粉河線の南大阪湾岸北部流域下水道工事に伴って、昭和62年度に和泉市肥子町所在の板原遺跡の調査を実施している。今回はその事業の２回目の立坑調査にあたり、和泉泉大津幹線（１）下水道管渠工事第５工区が対象である。昭和63年度は、虫取遺跡以外の立坑調査として和泉市府中町所在の和泉寺跡の調査を実施している。

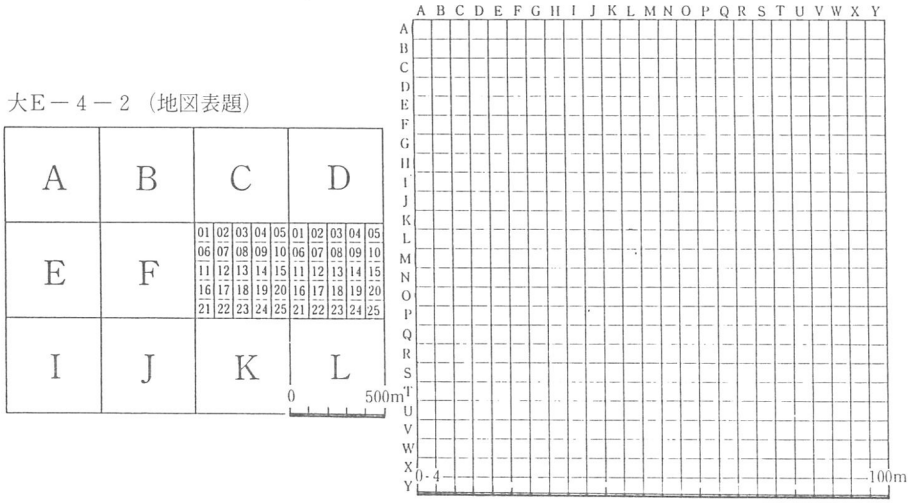
第Ⅳ章　調査の方法と成果

1，調査の方法（第５・６図）

調査地は、小面積である上に交通量が多い道路脇であるが、通常の調査と同一の方法を踏襲するように努めた。

調査区は、通行を確保する必要から二分し、前半調査区をＡ区・後半をＢ区と仮称した。

調査区内の遺跡の位置・地区割りを示すのに、(財)大阪府埋蔵文化財協会は国土座標を基軸に設定した独自のものを使用することを決めている。これは、「国土調査基本法」に基づく新平面直角座標系の国土座標第Ⅵ座標系（昭43年建設省告示第三〇五八号）を使用し、新版2,500分の１の地域計画図（地形図）を基本にして４×４ｍ（16㎡）の方形区画割りを行うもので、大阪府下全域をカバーする。地点名称や遺物取り上げなど発掘調査上の最小単位を示すものである。地区割りの呼称方法は、新版の大阪府地域計画地形図の横軸－Ｘ、縦軸－Ｙ軸（縦軸は南北座標を示す）を使用し、地形図を12等分している500×500ｍの区画をＡからＬのアルファベットで呼び、更に500ｍ区画を25分割して100×100ｍの区画を２桁の01～25までの数字で示す。この100ｍの区画を縦横それぞれ25等分して625分割した、４×４ｍの区画をつくり、縦方向を先に、横方向を後にして、アルファベットで行列として呼称する。地区割りを以上５桁の記号で示す。遺物の取り上げ・実測作業は、



第５図　地区割り法模式図

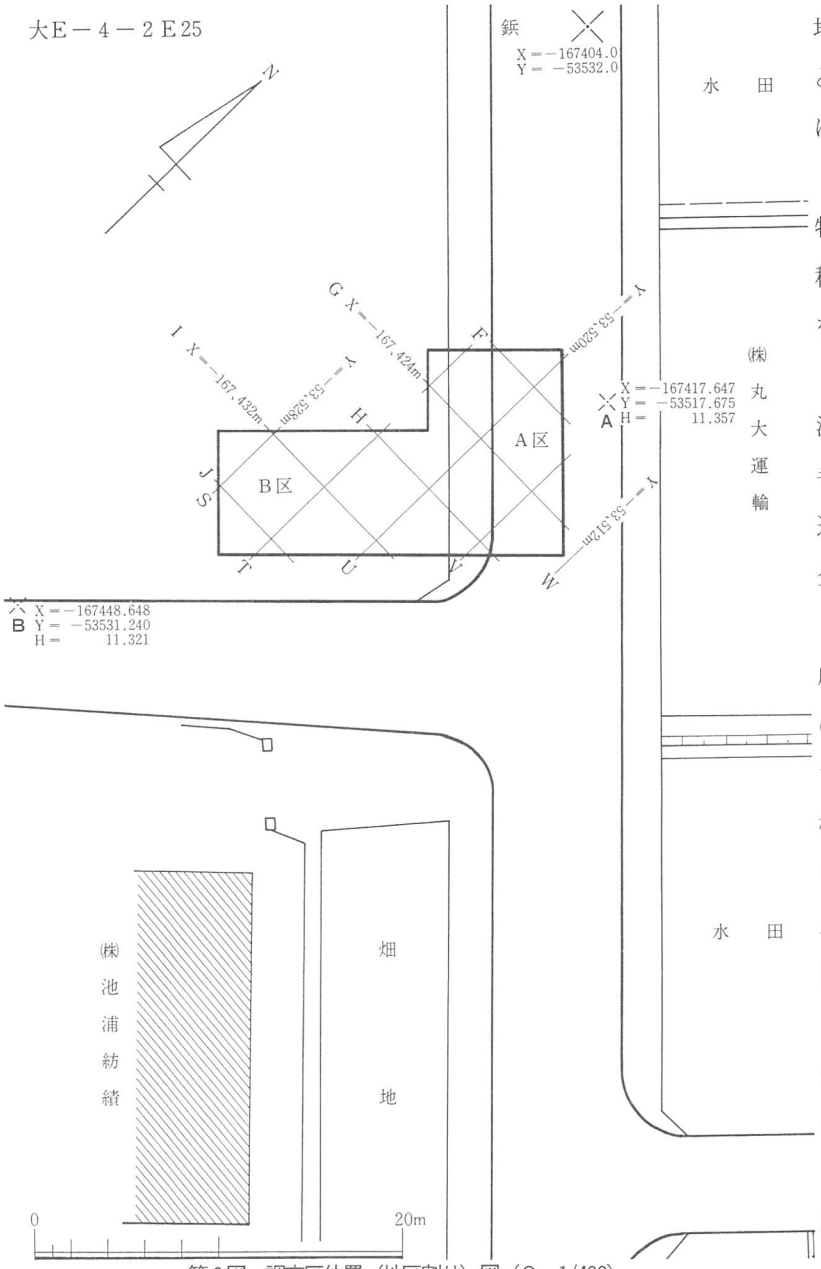
この地区割りのX・Y軸を基軸線として行った。なお、今回の調査対象地は、地域計画図・大E－4－2－E25に該当する。

具体的な掘削作業は、盛土層及びⅠ層をバックホーにより除去した後、Ⅱ層以下を人力掘削によって調査を実施した。各層の上面で遺構検出作業を繰り返し実施し、断ち割りで地山層の確認と土層の把握に力を注いだ。

地山層では、特に土層の堆積状況に注意をはらった。

全体遺構実測図作業は、手実測を行い、遺構全体図・全体土層図（1/20）を作成した。土層の色調については、『新版標準土色帖』を使用した。土質は、粒径区分によった。

写真撮影は、全景・遺構・土層断面等6×7モノクロ・35ミリモノクロと並行して



第6図　調査区位置（地区割り）図（S＝1/400）

カラースライドで行なった。

フイルムは、カラーFUJICHROME Professional モノクロFUJINEOPANを使用した。

出土遺物は、地区・層位ごとに分類し、洗浄・注記を行った後、代表的な遺物を選別して写真撮影を行い当報告書に掲載した。

2，調査の成果

a層序（第7・8図、図版四）

今回の調査区の内、A調査区は現府道泉大津・粉河線敷下である。道路の標高はT.P.＋11.25m前後を測る。道路建設に際し約1.3mの盛土を行っている。

B調査区は調査に入る以前は水田であったが、今回の工事に際し工事基地としていた為、耕作土を除去して道路面まで盛土がなされている。

基本層序は、0層（アスファルト及び盛り土）・1層（旧耕土・床土）・2層（近世・中世耕作土）・3層（中世層）・4層（地山層）の5つに大別される。なお、4層は黄褐色・灰黄色の粘土やシルト質とその下層の沖積段丘礫層（5層）に分けられる。

以下東壁の土層を基本として、調査地の層位について説明を加える。

道路建設以前の水田は、調査区内の25HTで坪界をなしており、調査区内では4枚の水田が存在している。それぞれ、北東をA－OZ・南東をB－OZ・北西をC－OZ・南西をD－OZと仮称して説明する。

水田の標高は、一番高いA－OZで約T.P.10.3m、一番低いC－OZで約T.P.10.1mを計る。ちなみに、遺構検出面の標高は概ねT.P.10.0～9.8m前後である。

0層（盛土層）

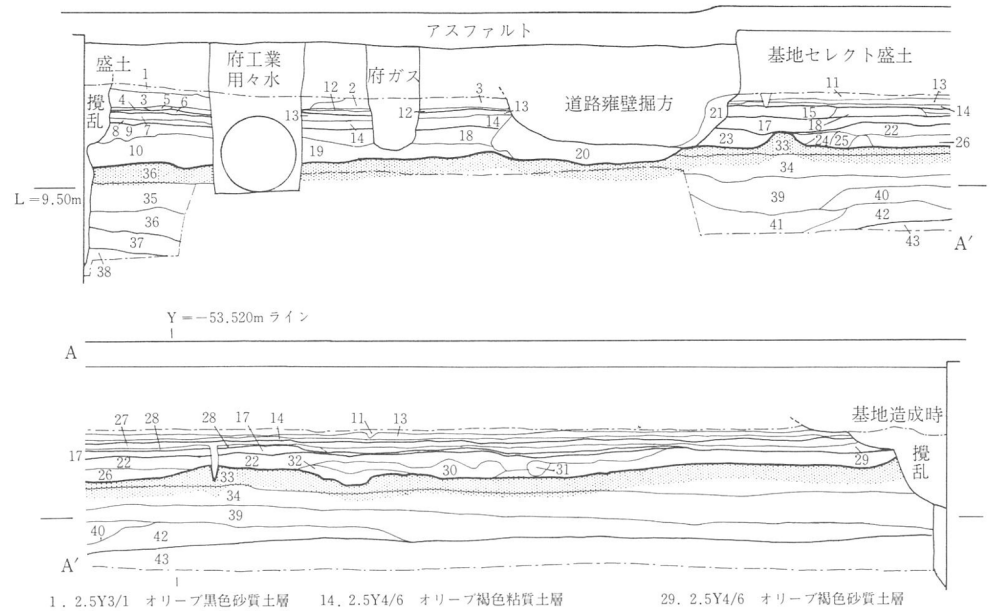
アスファルト（約20㎝）及びセレクト・廃土（約40～60㎝）の盛土層が認められる。ガス管埋設・道路擁壁の掘方の新旧の撹乱が認められる。最大の撹乱は1977年埋設の大阪府営工事用水道管で、地山面下30㎝まで達している。

1層（近現代耕作土）

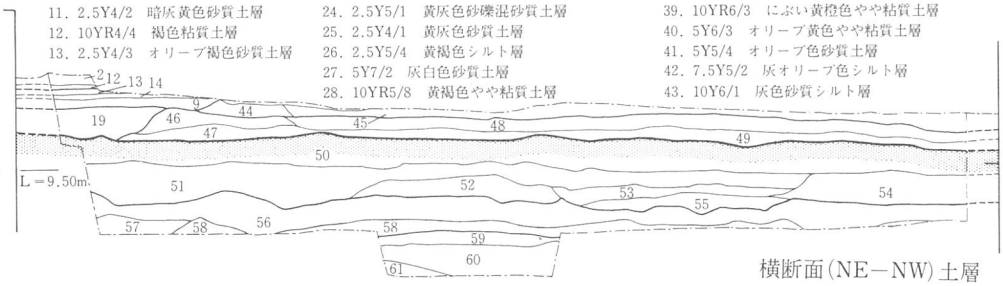
旧耕作土1a層及び床土1b層である。全体に削平を受けている。1a層はオリーブ色や暗灰黄色砂質土、1b橙褐色土である。B－OZでは、これら以外にもう一層薄い耕作土の痕跡を残している。B・C－OZ下層にわずかに近世陶磁器・瓦器の細片をかんでいる。

2層（近世・中世耕作土）

縦断面(NE－SE)土層



1．2.5Y3/1　オリーブ黒色砂質土層
2．5Y4/2　灰オリーブ色砂質土層
3．2.5Y4/6　オリーブ褐色粘質土層
4．10YR4/4　褐色粘質土層
5．5Y4/2　灰オリーブ色砂質土層
6．10YR4/6　褐色粘質土層
7．2.5Y5/2　暗灰黄色粘質土層
8．2.5Y4/6　オリーブ褐色粘質土層
9．2.5Y5/4　黄褐色粘質土層
10．2.5Y5/3　黄褐色粘質土層
11．2.5Y4/2　暗灰黄色砂質土層
12．10YR4/4　褐色粘質土層
13．2.5Y4/3　オリーブ褐色砂質土層
14．2.5Y4/6　オリーブ褐色粘質土層
15．2.5Y5/4　黄褐色粘質土層
16．2.5Y4/6　オリーブ褐色砂質土層(小畦畔)
17．10YR5/4　にぶい黄褐色粘質土層
18．褐色混灰色砂質土層
19．灰色砂質土層
20．10YR4/4　褐色粘質土層(溝埋土)
21．2.5Y5/3　黄褐色粘質土層(　〃　)
22．2.5Y3/3　暗オリーブ褐色砂質土層
23．2.5Y6/3　にぶい黄色微砂シルト層
24．2.5Y5/1　黄灰色砂礫混砂質土層
25．2.5Y4/1　黄灰色砂質土層
26．2.5Y5/4　黄褐色シルト層
27．5Y7/2　灰白色砂質土層
28．10YR5/8　黄褐色やや粘質土層
29．2.5Y4/6　オリーブ褐色砂質土層
30．2.5Y5/2　暗灰黄色砂質土層
31．10YR6/1　褐灰色砂質土層
32．10YR5/4　にぶい黄褐色砂質シルト層
33．2.5Y5/4　マンガン含粘質土(地山層)
34．10YR6/2　灰黄褐色粘質土(　〃　)
35．10YR6/8　明黄褐色粘質土層
36．7.5Y6/3　オリーブ黄色砂質土層
37．5Y6/3　オリーブ黄色微砂質土層
38．5Y5/2　灰オリーブ色微砂層
39．10YR6/3　にぶい黄橙色やや粘質土層
40．5Y6/3　オリーブ黄色やや粘質土層
41．5Y5/4　オリーブ色砂質土層
42．7.5Y5/2　灰オリーブ色シルト層
43．10Y6/1　灰色砂質シルト層



横断面(NE－NW)土層

2．2.5Y4/6　オリーブ褐色粘質土層
12．10YR4/4　褐色粘質土層
13．10YR4/6　褐色粘質土層
14．2.5Y5/2　暗灰黄色粘質土層
9．2.5Y4/6　オリーブ褐色粘質土層
44．5Y8/4　淡黄色粘質土(畦畔)
45．2.5Y7/6　マンガン含む明黄褐色砂質土層
19．2.5Y5/3　黄褐色粘質土層
46．2.5Y5/2　暗灰黄色砂質土(畦畔)
47．2.5Y5/2　淡暗灰黄色砂質土層(　〃　)
48．10YR7/4　マンガン含むにぶい黄橙色砂質土層
49．2.5Y5/3　黄褐色砂質土層
50．10YR6/8　明黄褐色粘質土(地山層)
51．10YR6/8　淡黄色砂質土灰色シマ混明黄褐色粘質土層
52．10YR8/4　浅黄橙色粘質土層
53．5Y7/3　浅黄色やや粘質土層
54．10YR7/6　明黄褐色粘質土層
55．5Y7/2　灰白色粘質土層
56．緑灰黄色砂質土及び淡黄色粘質土層
57．青灰色砂質土層
58．5BG5/1　暗灰青色砂質土層
59．青灰色微砂質粘土
(こぶし大の礫粗砂混り)
60．10GY6/1　緑灰色砂礫層
61．7.5YR5/6　明褐色砂礫層

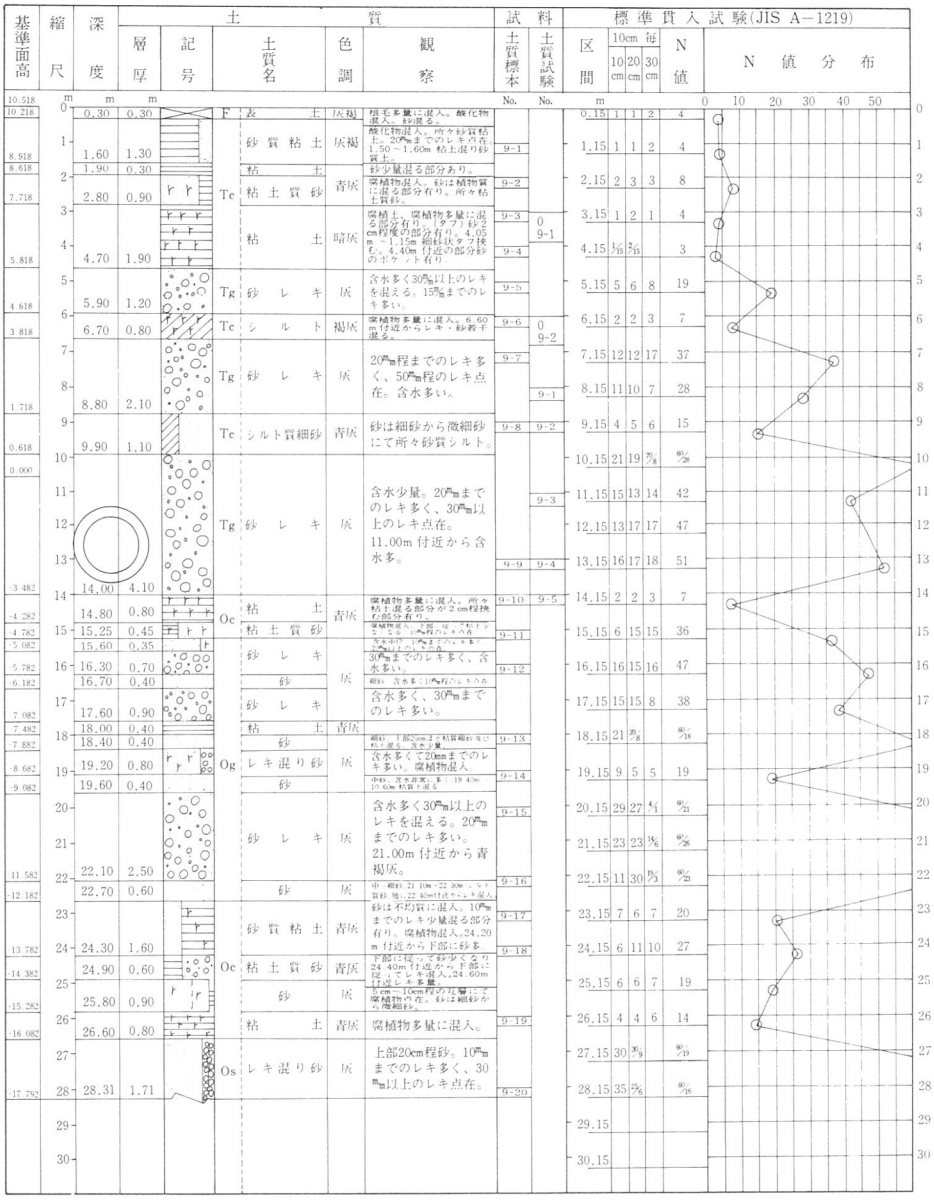
0　4 m

第７図　調査地横断面・縦断面土層図（Ｓ＝1/80）

基準面高　T.P.＋10.518m　　1987年２月

地下水位　G.L. －1.70m

（府土木部下水道事務所提供）



第８図　調査地点（No.９地点）ボーリング土質柱状図

２ａ層は灰色の堅くしまった耕作土である。２ｂ層床土混じりの灰色土、もしくはＢ－ＯＺ南では黄褐色の床土となる。Ｂ・Ｄ－ＯＺではさらにもう一枚耕土と床土が認められる。遺物の大半はこの２層から出土している。上層は近世で、下層は中世の水田と考えられるが、６～５㎝と耕土はかなり薄い。幾度となく繰り返されたほ場整備の結果であろう。

３層（中世層）

３ａ層は厚さ12㎝前後の褐色混じり灰色砂質土で、全体を覆っている。３ｂ層は部分的に認められるが礫混じりの灰色砂質土である。遺物は少ないが中世の遺物を包含層しており、耕作土と考えられる。

４層（地山層）

全体には黄褐色粘質土が覆っている。その下層には灰黄褐色砂質土、黄橙色微砂土層や灰オリーブシルト土層、青・緑灰色微砂質土層が互層を成しており、沖積段丘層となっている。

５層（地山層）

地山層の段丘礫層で、南から北に傾きをもって堆積している。これも、礫層の間は微砂や細砂で、互層を成していることが観察できた。以下地下30mまで砂礫とシルト土質土層・粘土質土層が互層を成している様子が土質柱状図（第８図）から観察できる。

ｂ包含層と出土遺物（図版四）

２層と３層が遺物の包含層にあたる。遺物の大半は２層下層と３層上層から出土した。特にＡ・Ｂ－ＯＺの２ｂ・ｃ、３ａ層の中世客土が多い。２ａ層の近世陶磁器片の他は２・３層とも古墳時代土器・中世土器類の細片が混在している。量的には玉葱袋18袋で、ローリングを受けているものが多く、細片ばかりであり、図化できるものはなかった。

中世遺物として白磁、須恵器鉢、瓦器椀・皿、土師器皿・甕、羽釜、瓦などの細片がある。13世紀から14世紀にかけての遺物と比定できるものである。

古墳時代の遺物は須恵器杯、高杯、甕、蛸壺、土師器高杯などで、６世紀後半の時期の遺物を量的に多く含んでいる。

図版四の９－１は須恵質の飯蛸壺の釣鐘部分、５－１は須恵器杯蓋のツマミ部分、10－２は杯身、10－１は須恵器壺の口縁部、５－３は壺の体部、９－３は玉縁の白磁口縁部片、５－２は瓦器椀の口縁部、10－３は土師器甕の破片、９－２は瓦質土器の甕、18－１は陶器破片、11－１は瓦の破片である。

c検出遺構（第10図）

今回、A・Bの調査区において検出した遺構は、すべて4層（2.5Y5/4黄褐色粘質土や10YR6/8明黄褐色粘質土）上面で検出されたものである。

遺構は、土坑1基・ピット11個・不定ピット3個・自然流路と上層からの杭跡がある。時期を明確に限定できるものはなかったが、包含層や埋土の状態から古墳時代以前の遺構と中世以後の耕作に伴った遺構とがある。

以下一括して遺構の解説を加えておく。

土坑1－OO（第9図）

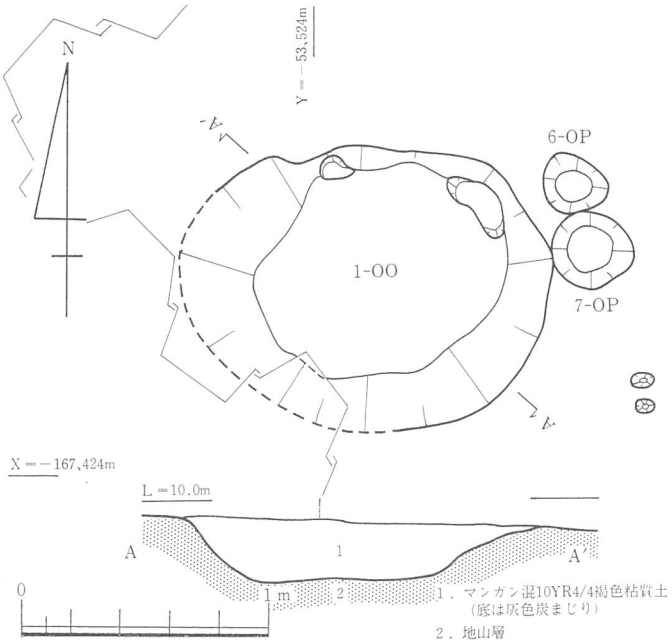
A区の北西端25TF付近で検出した土坑である。土坑西辺は調査区外に延びているが、楕円形を呈していたと思われる。

長径約1.4m・短径約0.75m以上を測り、深さは0.24m程で、スリバチ状の断面を呈する。底と土坑のカタ部分で、幾分凹凸を呈す。

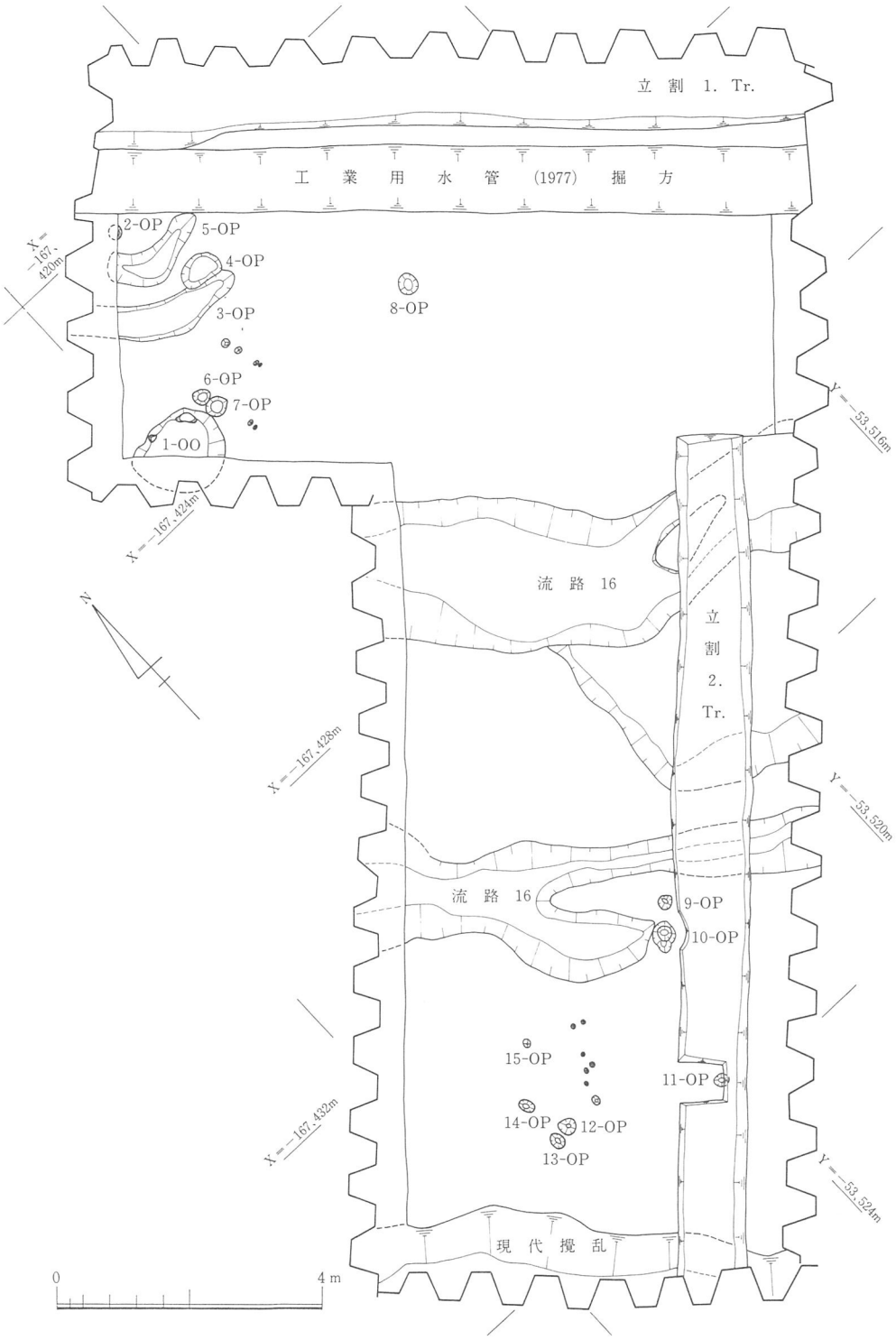
埋土は、マンガンを含んだ10YR4/4褐色粘質土で堅くしまっており、底面ではやや灰色がかり、炭が混じっていた。土器などの遺物は何も検出されなかったが、埋土や包含層の状態から判断して、古墳時代以前の土坑の可能性がある。

ピット2－OP

A区の北端中央25TF付近で検出したピットである。



第9図　土坑1－OO　写真・平面断面図（S＝1/30）



第10図　調査地遺構全体図（S＝1/100）

径約0.2m・深さ約0.16mを測る。埋土は、土坑１－ＯＯと同様である。柱痕などの痕跡は認められない。遺物は何も検出しなかった。

これら２つの遺構の埋土は上を覆う層とは全く異ったもので古墳時代以前の時期のものだとすると生活面そのものが削平を受けていると考えられる。

ピット６・７・８・10・11・12・13・14・15－ＯＰ

Ａ区の25ＴＦ・ＵＦ、Ｂ区の25ＴＩ・ＳＩで検出したピットである。径状は約0.3mの円形と楕円形を呈し、深さ0.15m～0.08m前後と非常に浅い。埋土は、黄灰色を基本とした砂質土であった。耕作に伴ったピットと思われる。遺物は何も出土しなかった。

不定ピット３・４・５－ＯＰ

Ａ区の北端25ＴＦで検出された楕円形や浅い溝状の不定ピットである。溝状の３－ＯＰは径は２ｍ・幅0.6～0.3m前後である。概ね深さは0.1～0.08m程である。埋土は黄灰色砂質土で、出土遺物はない。上層の耕作に伴ったものと判断される。

９－ＯＦ・杭跡

Ｂ区のＴＩの３層上面で検出したピットである。Ａ区の北端25ＴＦでも６個・Ｂ区の25ＳＩで７個の杭の跡を検出した。杭跡は径10㎝前後の円形で、深さは共に10～５㎝前後を測る。埋土の状態などは、２層と同様で、上層の耕作によってできたピットと杭の痕跡と思われる。近世以前の耕作に伴ったものであろう。

自然流路16－ＯＸ

Ａ区南端からＢ区中央の25ＳＨ～ＴＩ・ＴＧ～ＵＨ付近で水の流れによってできた赤褐色や灰白色の細砂・微砂の堆積した不定形流路跡を確認した。流路は地山層を削りこんでおり、地形に合うように南東から北西に流れたと判断できる。深さ20㎝前後と浅く、洪水など短時期の流れのようである。中世の包含層がその上を覆っており、包含層形成時には大半を削平していると考えられるので、水が流れたのはそれ以前と判断できる。

第Ⅴ章　まとめ

すでに第Ⅱ章で触れたが、虫取遺跡では散発的ではあるが、大阪府教育委員会・泉大津市教育委員会を中心として発掘調査や地道な立会・試掘調査が実施されてきており、調査成果が蓄積されてきている。しかし、調査内容は報告書という形では公刊されておらず、不明良な点が多いのが現状である。

今回の調査は、集落の範囲・埋没深度・遺跡の性格などを把握することに主眼をおいて、土層の観察・遺物の散布状況にも注意をはらったが、小規模調査であったことなどからその目的を充分に満たすだけの遺構・遺物の出土を見なかった。

以下従前の調査の知見を加え、二・三列挙してまとめとしておきたい。

今回の成果

1，調査区には、鎌倉時代後期以後、包含層が連面と厚さ約25㎝にわたって形成され、耕作地として利用されていた。検出した杭などの遺構は、これらに伴ったものであった。また、今回の調査地には各時代により若干畦畔のずれはあるものの４枚の水田が認められ、府道の下が坪界に当たっていた。断面観察の結果から、耕作地は中世の開発によって形成されたと考えてよい。

2，耕作にあたっては、大規模に整地を行っている。耕作土である包含層の各層には、近世・中世・奈良時代・古墳時代の遺物、特に中世の包含層には、５世紀末から６世紀後半・８世紀の須恵器・土師器や13世紀の瓦器・土師器類など多くの遺物を含んでいる。このことから、４層（黄褐色粘質土層）上面に、該期の遺構面が存在した可能性も考えられる。特に古墳時代遺物が目だつことや今回検出したピットを考え併わせると、集落跡の存在が指摘できる。今後の調査においてその様相を明かにする必要がある。

3，南接する板原遺跡では、黄色粘土層中から縄紋土器の出土が報告されている。(註1) 今回の調査地では、遺物は全く包含されていないが４層である黄褐色粘質土が２層確認された。上層４ａ層が板原遺跡と対応すると考えられるが、土器が包含されているかどうか観察に注意する必要性がある。

4，今回の調査でＡ区の４層上面において埋土がマンガン混じり褐色土の土坑を検出している。出土遺物が皆無で時期は決定できないが、埋土の状態、締まり具合いからすると、

古く遡る可能性がある。周辺に遺構の広がりが十分予想される。縄紋から弥生時代にかけての集落が確認されたB・D地点からすると開析谷を挟でおり、谷部に生産地・周囲に墓域が展開していたと考えるならば、土坑の性格として土壙墓の可能性もある。

遺跡の展開と課題

虫取遺跡を語る資料は少なく、その内容・実態については不明確なところが多いが、遺跡は『大阪府文化財分布図』(註2)には旧諸瀬池を中心にマークされており、成立時期は縄紋時代晩期から弥生時代前期の接点の時期から中期前葉にかけて、と考えられる。さらに、古墳時代前期～後期・平安時代中葉～鎌倉時代の集落が存在してたことが明らかになってきている。

遺跡の範囲は、既往調査（B・C・D地点）の諸瀬池北方を中心とするようで、北へ広がりを見せ、池浦遺跡との関連を考える必要がある。南限は、大津川までと推定されるが、東限については開析谷を挟んでおり、集落は今回のA地点まで及ばなかったと考えられる。

虫取遺跡は、中期中葉以降、後期の遺物を欠き、遺跡の動向は不明である。弥生時代の集落が拡大・発展期を迎えた様子を窺うことはできない。縄紋晩期に成立を見た遺跡ではあるが、明確な住居跡・墓・水田等の遺構は未発見である。今後、これら遺構の検出が一つの課題となる。まだまだ遺跡の範囲・性格についても解明されなければならない問題点も多い。

和泉の弥生拠点集落は、海岸線に平行して線形分布を示し、これらの遺跡は、一時間での歩行可能距離である5.5㎞間隔（スパンA）のキャッチメントエリアに存在していたことが近年指摘されている(註3)。海岸から2～1㎞の標高20～10mの平野部に位置する6単位、山之内（大阪市）－四ツ池（堺市）－池上（和泉・泉大津市）－栄ノ池（岸和田市）－三軒屋（泉佐野市）－石才南（貝塚市）－男里（泉南市）の遺跡がそれにあたるという。

虫取遺跡はこれらの拠点集落の一つである池上（・曽根）遺跡との関係を抜きにしては考えられない。また、池浦遺跡の弥生時代集落との関係も考えなければならないが、関係を語る資料はあまりにも少ない。今後の資料の増加を待って考えたい。

虫取遺跡では、縄紋晩期の甕と篦描き沈線を有する畿内第Ⅰ様式新段階に位置づけられる壺・甕の土器が土坑内から一括して出土しており、この共伴関係は縄紋文化から弥生文化への過渡期の様子を示す好資料である。

また土器の胎土に生駒西麓産の物であろうと思われる角閃石が多量に含まれているとい

うことは、興味深い事実である。

古墳時代後期の集落は、海岸平野部同様、掘立柱建物で構成された集落と思われるが、今後、資料の増加を待たなければ集落構造は特定できない。

この辺りは、和泉国の外港であった「小津の港」と国府とを結ぶルートに当たっており、さらに和泉国二ノ宮で式内社でもある「泉穴師神社」が近接しており、奈良時代・平安～鎌倉時代の遺構は、それぞれとの関係を想定できる集落かもしれない。しかし、これもまた資料の蓄積が必要と考えられ、今後に期待したい。

和泉では、昭和44年以降、第２阪和国道建設に伴って遺跡の新規発見が相次ぎ、今も新規発見・遺跡の拡大が進行している。第２阪和関連では、四ツ池・大園・池上曽根・豊中古池・板原・栄ノ池・土生などの遺跡の発掘調査が行われ、成果の蓄積と同時に、一方では記憶が風化してきている事も事実である。

今後、これら遺跡の調査成果に基づいた研究の進展と虫取遺跡の地道な調査例の蓄積に伴い、遺跡の範囲の確認・性格・実態の解明・位置づけなど問題点も多岐に展開されるものと考えられる。

註

（１）　久米雅雄編「第２阪和国道内遺跡発掘調査概報－板原遺跡－」『大阪府文化財調査概要』1980・3

（２）　『大阪府文化財分布図』大阪府教育委員会文化財保護課　1986・3

（３）　酒井龍一「大阪湾沿岸地域における弥生セトルメントシステム－未発見集落の予測性－」『考古学論集』第２集　1988・5

板原遺跡の調査

第Ⅰ章　調査に至る経過

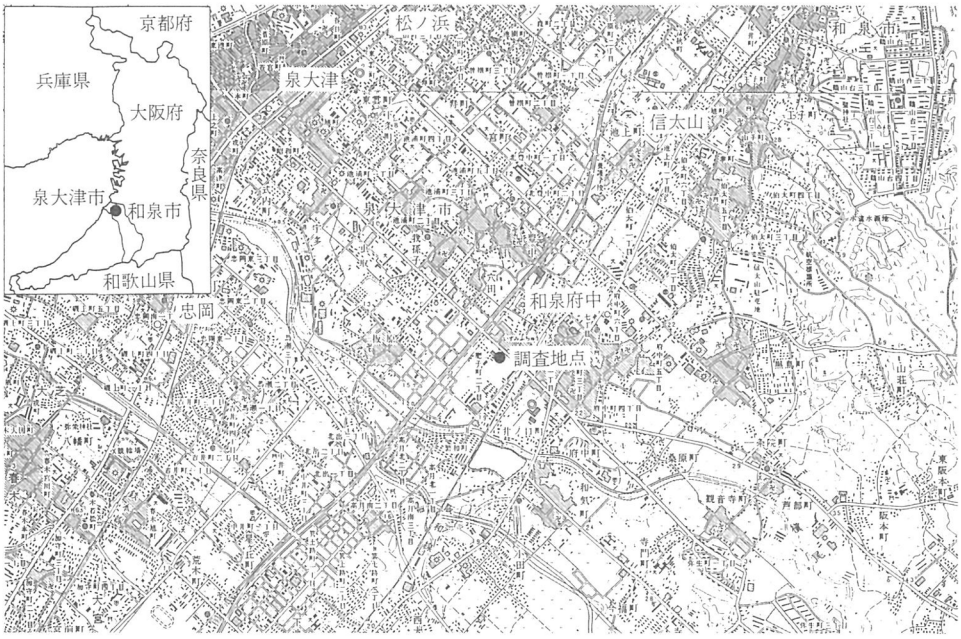
板原遺跡は泉大津市板原町、我孫子町、和泉市肥子町の東西約800m、南北約700mに広がる遺跡である。

国道26号線（第二阪和国道）建設以来、急激に増加した開発に伴い実施された調査により数多くの遺跡が周知されるに至った。板原遺跡は、豊中・古池遺跡調査会の調査によりその存在が明かとなり、続く大阪府教育委員会の調査により近世瓦窯、三十合池への導水施設、中世の建物跡、また縄文時代のピット、自然流路などが検出され、板原遺跡は縄文時代～近世に至る複合遺跡であることが判明した。

この板原遺跡内において関西国際空港の建設に伴いその関連事業として南大阪湾岸北部下水道事業が計画された。工事に先立ち、協議の結果、事業予定地内において発掘調査を実施することとなった。

調査は、大阪府教育委員会の指導のもとに(財)大阪府埋蔵文化財協会が行い、昭和63年3月15日に着手し、同月24日終了した。

調査地区は、国道26号線より東へ約200m、主要地方道泉大津粉川線沿いの肥子池公園北側に当たり、東西11.4m、南北8.4mのトレンチを設定して実施した。



第11図　板原遺跡調査地点位置図 1:50000

第12図　板原遺跡既往調査一覧図 1:1000

1，豊中・古池遺跡調査会、『豊中・古池遺跡発掘調査概報そのIII』　1976・3

2，大阪府教育委員会『第2阪和国道内遺跡発掘調査概報』－板原遺跡－1980

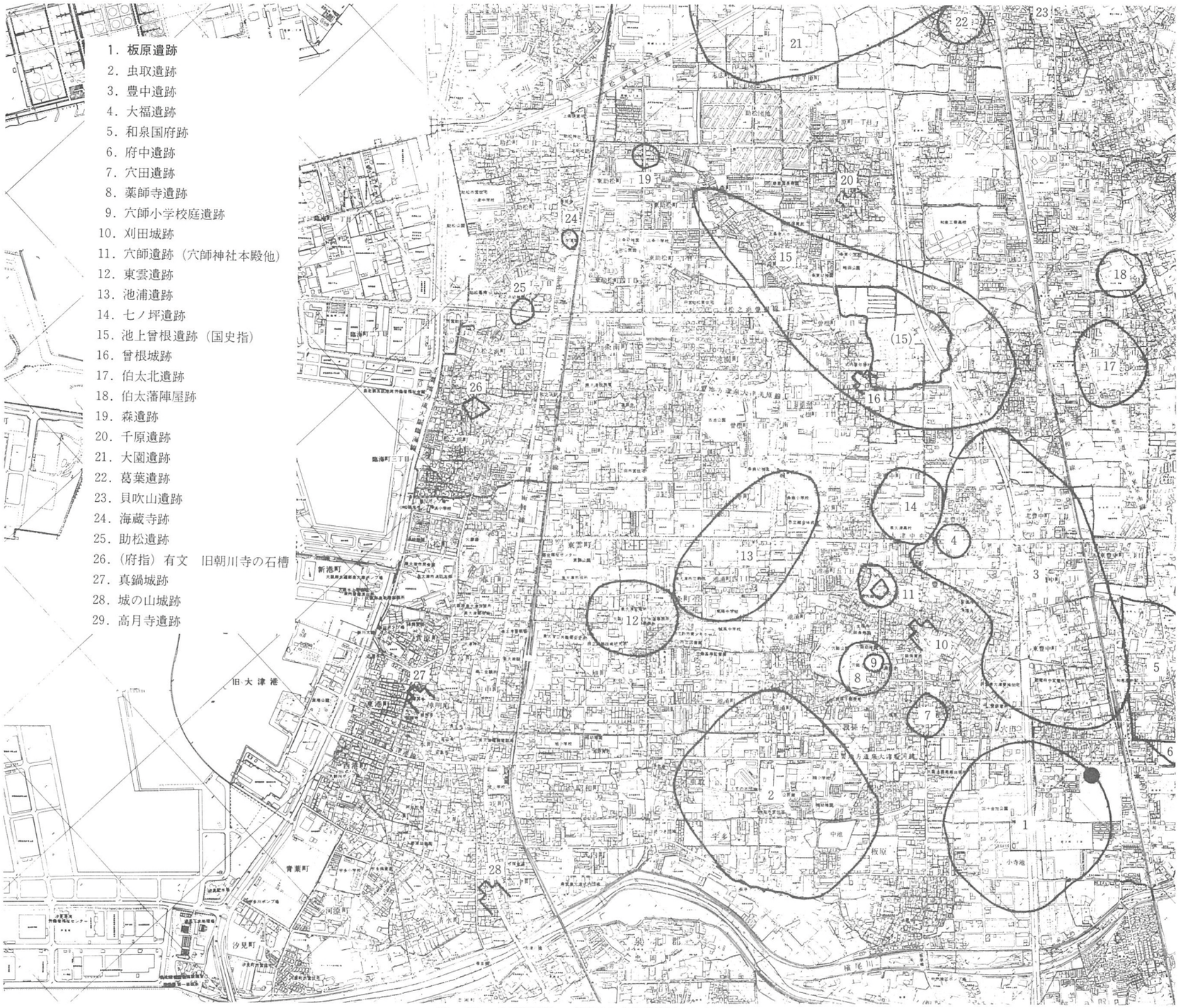
3，4，大阪府教育委員会『板原遺跡発掘調査概要』－国道26号線計量所及び無線鉄塔建設に伴う調査－　1984・1

5，6，7，8，泉大津市教育委員会、泉大津市文化財調査報告12『泉大津市埋蔵文化財発掘調査概要4』　1986・3

9，10，11，泉大津市教育委員会、泉大津市文化財調査報告13『泉大津市埋蔵文化財発掘調査概要5』　1987・3

12，13，和泉市教育委員会の御教授による。

その他，『和泉市史』、『泉大津市史』、泉大津高校地歴部『和泉の古代遺跡』1961参照



第13図　板原遺跡　周辺の主要遺跡 1:20000

第II章　位置と環境

和泉市は、大阪平野南縁に和泉山脈を従え、槇尾川・松尾川が大阪湾に北流している。槇尾川は和泉地方で大阪湾にそそぐ河川の中で最大であり、その槇尾川右岸に発達した底位段丘面には各時代の遺跡が数多く分布している。古くからこの地域の土地の開発が盛んであったことを物語っている。

板原遺跡は、この底位段丘面が沖積地へ移行する位置に営まれた遺跡である。（第４図）板原遺跡周辺における各時代の代表的な遺跡は以下のとおりである。（第３図）詳細は虫取遺跡に譲る。

旧石器時代－伯太遺跡[17]、大床遺跡、和気遺跡、野々井遺跡、百舌鳥本町遺跡、西山遺跡、琴山遺跡、葛城山頂遺跡、他

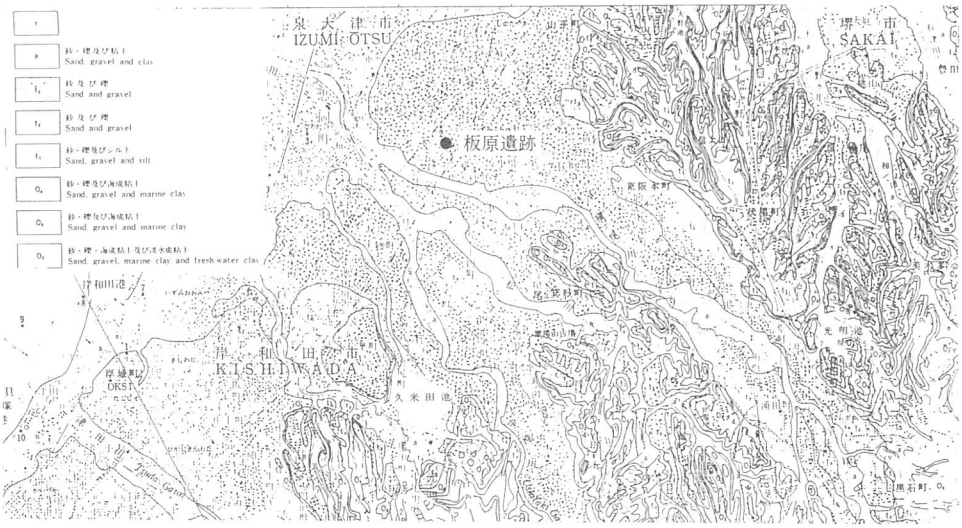
縄文時代－池上・曽根遺跡[15]、仏並遺跡、板原遺跡[1]、豊中遺跡[3]、虫取遺跡[2]、伯太遺跡、府中遺跡[6]、春木八幡遺跡、他

弥生時代－池上・曽根遺跡[15]、四ツ池遺跡、七ノ坪遺跡[14]、穴師遺跡[11]、古池遺跡、助松遺跡[25]、府中遺跡[6]、大園遺跡[21]、他

古墳時代－黄金塚古墳、摩湯山古墳、久米田古墳群、貝吹山古墳、信太山千塚古墳群、豊中[3]・古池遺跡、七ノ坪遺跡[14]、東雲遺跡[12]、大園遺跡[21]、他

飛鳥・白鳳・奈良・平安時代－豊中遺跡[3]、泉穴師神社[11]、他

鎌倉・室町時代－東雲遺跡[12]、古池遺跡、板原遺跡[1]、豊中遺跡[3]、穴田遺跡[7]、和気遺跡、他



第14図　板原遺跡周辺地質図 1:100000（参）通商産業省工業技術研究地質調査所発行

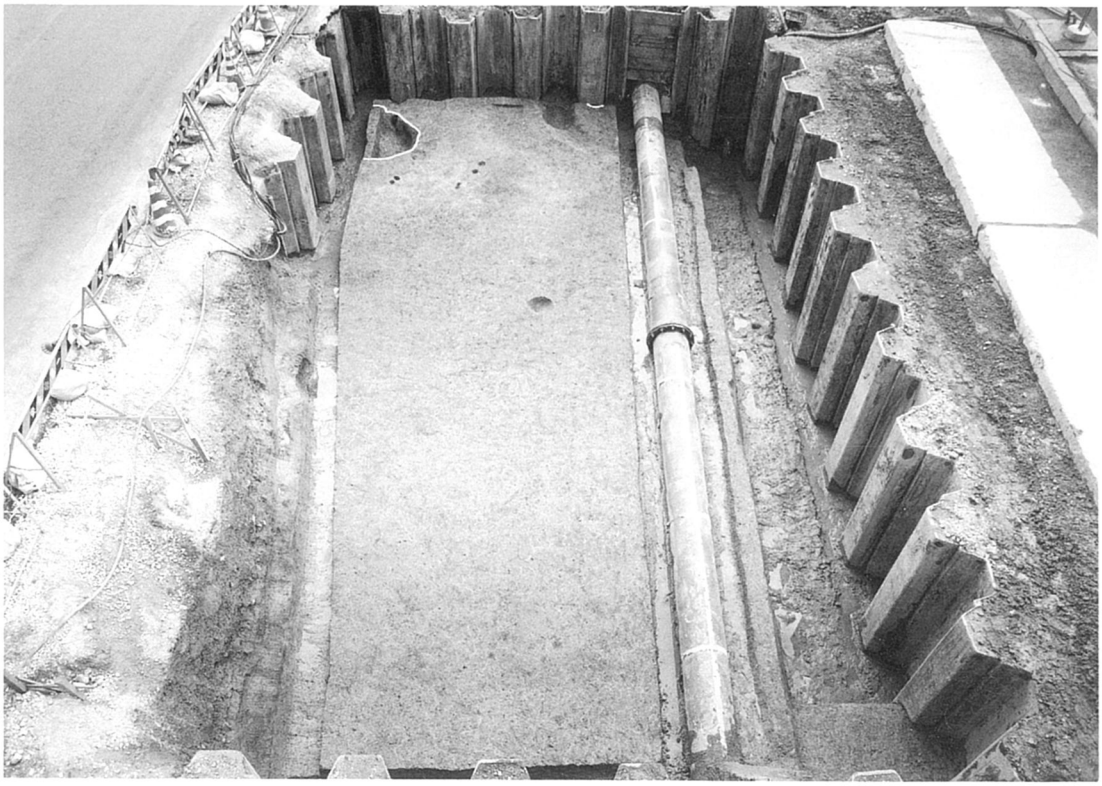
図　　版

図版一　虫取遺跡周辺航空写真

（昭和40年１月撮影、×印は今回調査地）

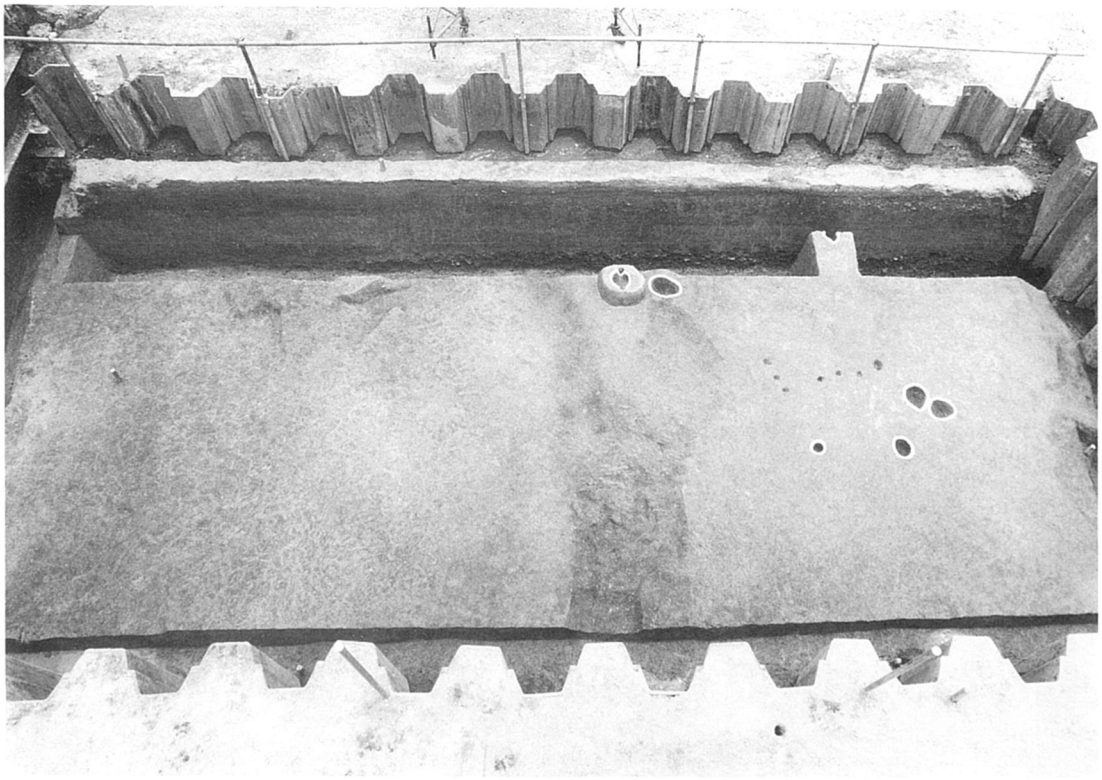
図版二　虫取遺跡A調査区全景

（北東から）

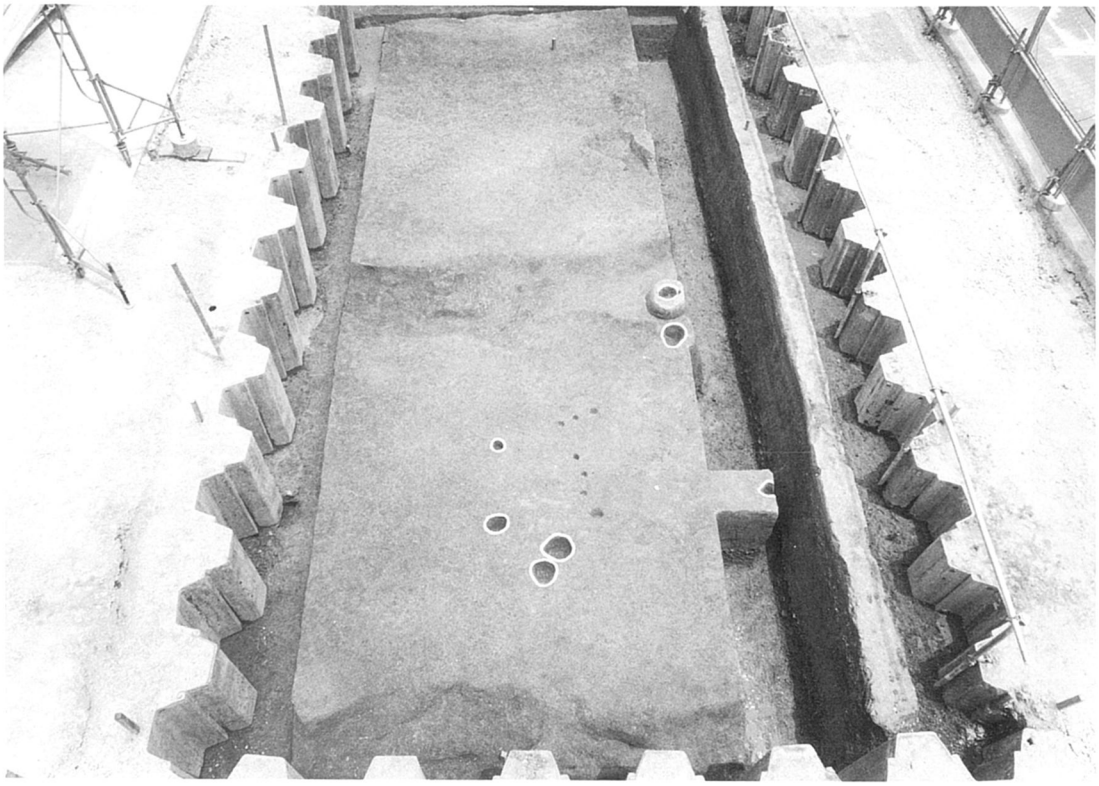


（南東から）

図版三　虫取遺跡B調査区全景



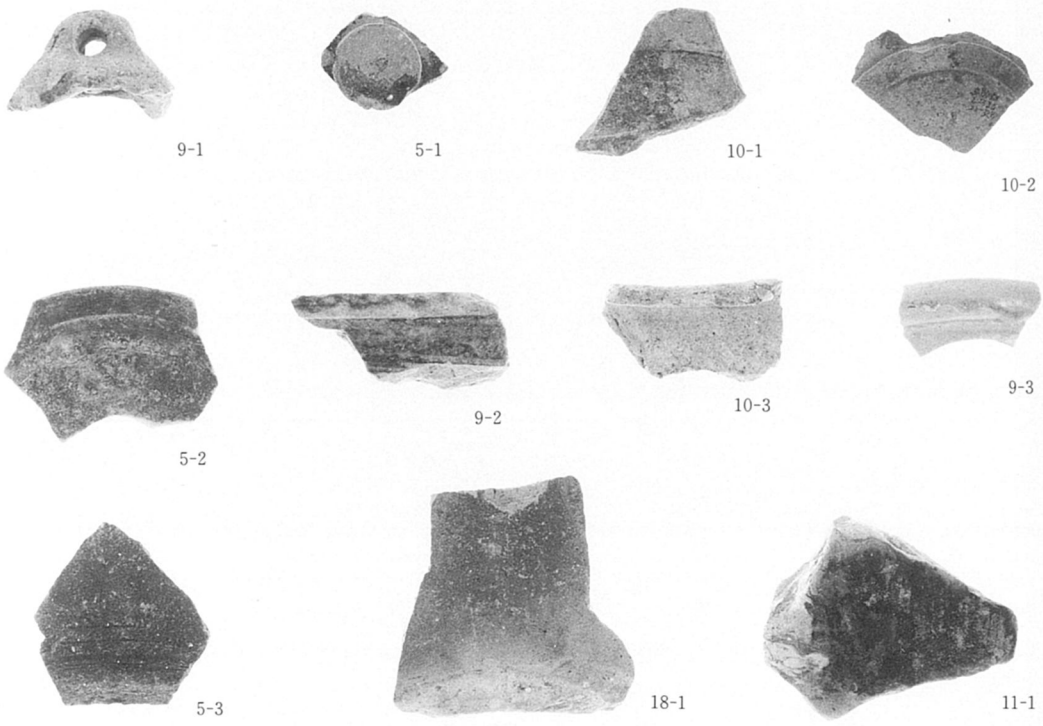
（北西から）



（南西から）

図版四　虫取遺跡土層・遺物

B調査区東壁土層（北から）



包含層出土遺物

図版五　板原遺跡周辺航空写真（昭和六二年撮影）

図版六　板原遺跡周辺航空写真（昭和四〇年撮影）

図版七　板原遺跡

調査前風景

トレンチ全景

図版八　板原遺跡

北東壁断面

南東壁断面

(財)大阪府埋蔵文化財協会報告書　第28輯
南大阪湾岸北部流域下水道事業に伴う

虫取遺跡・板原遺跡

—発掘調査報告—

昭和63年7月31日

編集・発行　財団法人　大阪府埋蔵文化財協会
大阪市東区谷町2丁目36番地大手前ウサミビル

印　　刷　株式会社　中島弘文堂印刷所